

審 議 会 等 の 会 議 結 果 報 告 書

		課所名	教育総務課
会 議 名	令和6年度第1回諏訪市総合教育会議		
開催日時	令和6年9月24日(火) 午前10時00分 ～ 12時00分		
開催場所	諏訪市役所 302会議室		
出 席 者	(出席者) 金子ゆかり市長、後藤慎二副市長、三輪晋一教育長、岩波健一教育長職務代理人、玉本広人教育委員、今井みどり教育委員、伊東雅美諏訪西中学校研究主任、NPO法人多様な学びプロジェクト生駒知里代表理事、前田孝之企画部長、細野浩一教育次長、柳平直章企画政策課長、伊藤勝徳教育総務課長、五味裕史生涯学習課長、柿崎茂スポーツ課長、小林純子生涯学習課文化芸術担当課長、堀川和俊企画政策係長、茅野光徳教育総務係長 (計17名) (欠席者) 草間教育委員 (傍聴者) 9名		
資 料	紙ベースなし		
協議議題(内容)及び会議結果(要旨)			
1. 開会 (進行:企画部長)			
2. あいさつ (市長) (教育長)			
3. 議題 1「インクルーシブな社会の実現に向けて～多様な学びを支える～」 (1)諏訪市(長野県)の取組 (2)学校における実践報告(諏訪西中学校の取組) (3)多様な学びを支える民間団体等の取組(NPO 法人多様な学びプロジェクト)			
2 意見交換 (教育長職務代理人) 自分にちょっと与えられた項目といたしまして、義務教育段階における学校の役割というものについて考えさせていただきました。義務教育段階の学校は、子どもたちの成長にとって非常に重要な役割を果たしていると思っています。その意義は多岐にわたりますけれども、その中でも基礎学力の育成、読み書き、昔で言うそろばん、算数などの基礎的な学力を身に付けさせ、将来社会生活を営むための基礎を学んでもらう。続いて社会性の育成、友人、先生方との関わりを通じて協調性やコミュニケーション能力を育み、社会の一員として生きていくための準備をする。そして道徳性の育成、正しいこと、間違っていることの判断能力を養い、道徳的な価値観を育む、また個性の伸長として、個々の興味や才能を引き出			

し、それを伸ばすための機会を提供する場とする。また、穏やかな成長の支援として、心身ともに健やかに成長できるよう、様々な活動を通じてサポートする。そして学習習慣の定着、自ら進んで学ぶ習慣を身に付けさせ、学習することが生活習慣の一部となるようにする。さらに、義務教育は全ての子どもに平等な教育機会を与えるという重大な役割を担っていると思っております。

その中で義務教育がなぜ大切なのかということを考えてみましたけれども、社会全体の底上げとして、全ての子どもたちが基礎的な学力や社会性を身につけることで社会全体のレベルアップが図れる。また、人材育成として将来様々な分野で活躍できる人材を育成し、社会の発展に貢献する人材を育成する、というものの基本的な部分になっているかと思っております。

ただ、そのような目的、趣旨を持った義務教育学校ですけれども、昨今多くの変革が求められていると思っております。現在、従来の先生 1 人で多くの子どもたちに同じペースで同じ内容を教える、この方式が今の子どもたちにそぐわなくなっています。理解が進んでいる子どもにとっては退屈に感じ、理解ができない子どもにとっては退屈な意味不明な時間に感じてしまっている、結果学校がつまらない、そんな状況を目にする昨今です。

そのような中で、諏訪市の教育大綱の主題として、「誰もが輝き 誰もが幸せ 新たな時代を切り拓き つながり続ける学びの和」、「互いに寄り添い、支え合うことで誰ひとり取り残されることなく、可能性が最大限活かされ、かけがえのない存在として自立すること」があります。今回のテーマであるインクルーシブ教育で義務教育学校が果たすべき役割の一例として、諏訪西中学校の活動を大変興味深く聞かせていただきました。子どもたちの個々の特性を生かす授業を行うには、従来の先生 1 人での授業形態では細かいところまでは目が届かないため、支援員の協力が不可欠と考えられます。その中で、支援学級での充実、どこの学校でも支援学級が増えている状況と思われます。通常学級においても支援が必要な子どもたちが増えているとお聞きしています。子どもたち個々に寄り添うには教師 1 人では目が届かず、支援員の先生の協力なしでは授業が進まないとも聞いております。

支援員の先生の力量も様々で、担任や教科担任との情報交換が必須とは思われますが、そのための時間が不足しているとお聞きしております。その一因として、支援が必要な子どもたちが多く、連携、特に検査や相談への調整、連絡、資料の作成等に多忙になってしまっている、ということが考えられると思います。また、残念ながらお聞きした話ではありますが、支援員に対する諏訪市の賃金が安い、そのため諏訪市で働きたいと思っても他の市町村に行ってしまうという声もお聞きしております。

先生方、親の意識改革も必要かと思われます。職員の中には、意識の低い方がいたり、理解不足の先生もいらっしゃるからお聞きしています。困っている親御さんもいらっしゃいますけれども、また同じく全く無関心な親御さんもいらっしゃるからお聞きしています。親の意識改革も必要ではないのかと思います。

担任の先生や教科担任の先生の授業内容の工夫も必要かと思われます。ずっと座ってられない子どもたちに、50 分と長時間の授業は苦痛に感じられると聞いております。先生方は現在進行形でしっかり対応していただいておりますけれども、なお一層の授業改善を進めていただければと思います。それについては、授業の準備をする時間を先生方により多く与えていただければと思っております。

また、通常学級での支援の充実、お話にもありましたけれども、黒板、板書の工夫が大切だと思います。誰にでも一時限の授業内容がわかる板書、ノートへの記帳の仕方がわからない子どもがいらっしゃるからお聞きしています、ユニバーサルデザイン化は大変有効だと思います。

生駒先生のお話にもありましたけれども、子どもにとって学校でも自宅でも安心していられる場所があるか、また、安心して一緒に過ごせる人がいるかどうか、居場所作りというものが大切になってくると思います。

また、コミュニケーションシートの有効活用に期待をしたいと思います。聞き忘れた、言い忘れた、がなくなり、教え方の共有が図られ、より一層子どもたちに寄り添うことができるのではないかと思います。聞かせていただきました。

諏訪西中学校からの資料にありました「教師として大切にしたいこと」、本当にこの考え方は大切だと思います。多くの先生方にこの考え方をずっと持って、生徒に、子どもたちに当たっていただきたいと思います。それには先生方が元気に出勤できる学校作りというの也需要かだと思います。一つの例として、教室のほうのエアコン設置は進んでおりますけれども、まだまだ先生方の居場所へのエアコン設置が十分ではないようにもお聞きしております。ぜひ先生方の健康管理、体調維持においても、その関係のものを進めていただければと思います。子どもと親に寄り添える学校、そして学校職員の皆さまであって欲しいと思います。

学校は、社会の一員となるための知識の習得と社会生活の基礎を学ぶ大切な場所と考えます。この点を踏まえた上で、子どもたちがより良い教育、また生活環境の学校になることを希望したいと思います。以上です。

(教育委員)

先ほど生駒先生のパワーポイントの中にありました「【シンポジウム】不登校当事者の実態とニーズを把握し官民共創でつくる効果的な施策とは」をちょっと見させていただいたのですが、その中で生駒先生の報告に対するコメントで、東京学芸大学教授の加瀬先生が、「今から 15 年前に初めてフリースクールにお邪魔したときに衝撃を受けた。何に衝撃を受けたかという、学校に行くのが当たり前で一生懸命やるのが当たり前だという価値観に私自身がもう全身染まっている」と、仰っていたのですね。私これを聞いて実はこんな偉い先生でも昔はそうだったのだなと、その後それを払拭するのに 10 年以上かかったと先生は仰っているのですが、ある意味全然変わっていない私に対してちょっとほっとした自分がいまして、実際インクルーシブ教育、インクルーシブな社会というテーマは非常に難しく感じています。もちろん教育委員会などで話題になっていますし、諏訪市の教育大綱もその理念を基にして作られている訳ですから、その概念や求めるところは理解できるのですが、やはり学校は行ったほうが良いのでは？と思う自分もいたりしますし、また不登校の子どもたちと関わる機会も今までほとんどない中で、どのように関わったら良いかも全く分からないというのが実際自分の中では正直なところですが。

後ほど時間があれば先生から実際にお聞きしたいところでもあるのですが、生駒先生のパワーポイントの中に「子どもを真ん中にした多世代交流の場は、地域の大人にとっても多様な生き方を認め合う温かみのある地域社会の入り口に」というお話もありまして、育成会や地区のお祭りなどで子どもたちと関わる機会は私たちもありますけれども、例えば休養をしっかりと世の中に出てくる子どもたち、フリースクールなりあるいは地域に出てきた子どもたちとどのような接点を持って行けば良いのかなとか、あるいはその距離感が非常に難しいと思っていまして、その辺をどのようにしていけばいいのかというのを後ほど時間があればお聞かせいただければと思います。

それから、シンポジウムの調査報告の中に、不登校や学校に行きづらかった時代に「理解者がいた」と回答した人は、「理解者がいなかった」と回答した人よりも「不登校経験が有利になった、あるいは活かしている」と感じている割合が高い傾向が見られたという報告がありまして、興味深いなと思ったのですが、要はしっかり休養をする中で理解者がいる子どもたちは学校にも行きやすいのだろうと思います。そんな中で今学校に行きづらさを感じている子どもたちに向けてのメッセージというものが紹介されていたのですが、例えば「休んでも良いんだよ。私だって休んでるよ。」という 8 歳の女の子からのメッセージであったりとか、「小学校 5 年生から中学三年間学校に行っていなかったけど、今高校めっちゃ楽しいし勉強も意外となんとかなるよ。」という 17 歳の男の子からもこのようなメッセージが届きまして、不登校の子どもたちがその経験をもとにきちんと自己主張をして困っている他の子どもたちのためにメッセージを送っていることに驚きました。

その中で、「選択というと『何かをする』というイメージにつながりやすいですが、『これはしない』や『何もしない』という選択も非常に大事だと思っています。たくさんの選択肢から、急がず焦らず、自分の経験と直感と考えを信じて色々なこと(もちろん何もしないことを含めて！)を試してみてもはどうでしょうか。」

という 16 歳の女の子からのメッセージがあり、またパネルディスカッションの中でも、不登校を経験した子どもの立場からの声として、選択肢を「こうしなきゃ」として 1 つの答えを言うのではなくていろんな風を選べたらいいなということ、選択肢を選ばない権利も私たちにはあるということ、そしてやらないという選択肢もあるということ、を述べた子がいました。生駒先生のほうからも当事者、特に子どもたちの声からを基本にするというお話がありましたけれども、当事者は声が上げづらいということもありますので、良く耳を傾けないといけなのだろうと思います。パネルディスカッションの中でも、「大人のよかれは子どもの迷惑」などという言葉も出ていまして、どうしても大人は自分たちの考えを押し付けるような形で、その選択肢はあくまでも自分たちが示した選択肢の中から選ばせてしまう状況があるのかなということを感じております。ここら辺も自分たちの中で払拭していかなければならないのかなと、非常に難しい問題だなと思っています。

教育機会確保法に「不登校というだけで問題行動であると受け取られないよう配慮すること」とありますが、不登校になってしまったのではなくて、学校以外の場所を選択したという自分の意思であると子どもたちや私たち社会のほうも認識を持てるように、まずは私たちがそういう壁を取っ払っていかなければいけないのかなということを感じました。

それから、教育機会確保法にはもう一つ、「不登校の児童生徒の支援をする際は社会的自立を目指していく」と書いてあるのですが、教育現場については、西中や生駒先生の団体の皆さんが実践されているような細かい工夫の積み重ねで、これからインクルーシブ教育そのものはシステムとしても進んでいくと思います。学校復帰をした子どもたちは、まだこれから学校の中で就職であるとか進学であるとか、次への窓口を示してもらったりとかしていると思うのですが、例えば学校復帰しなかった子たちにとって、どういう窓口がそういうところにあるのだろうかとか、あるいは社会のほうはまだまだ受入れ体制が整っていないのではないかということも感じておりまして、そういう意味では我々がもっと頑張って、様々な人材を受け入れられる余裕のある社会を目指さなければいけない、作っていかなければいけないのかなと改めて思いました。

それには是非、市長にも政治力を発揮していただいて、様々な施策を打っていただければ良いなと思ってはいるのですが、そもそもの話として、学校復帰を目指すべきなのかということ、どうしても先ほどの学校に戻れない子どもたちの話の中で学校復帰というものが圧力になっていきます出られなくなってしまうという話もありましたけど、もしそれを目指さないでいいよというのはちょっと何か学校否定につながってしまうような気がします。何か頑張ってらっしゃる先生たちもちょっとかわいそうかなって気もするのですが、でも実際は戻れない子どもたちというか居場所のない子どもたちが一番かわいそうなので、実際にどこを本来は目指していくべきなのかというのが私の中でも全く見えていないというかわからない部分です。

それから、フリースクールの子どもたちとか、ようやくちょっと社会のほうに出てこられた子どもたちとどのような距離感というか、どのような感じで接点を持っていけばいいのかなというのをもしお聞かせいただければと思うのですが、よろしくお願いします。

(生駒代表理事)

最初にご質問いただいた部分については、やはり、まだまだ社会が旧来のものだったりするので、元気になってくるとどの段階かというのはそれぞれですけど、小・中の段階の子たちもいれば、あと今通信制高校とかも広がっているので、高校の段階ですとか、大学の段階から学校に行きたいと言って戻る子たちが結構多いです。なので、その部分までずっと、ご家庭のほうでもしっかりと支援をしている子どもたちは、実は 18 歳の段階で大学に行きたい、専門的なところで学びたい、自分がこうなりたいって夢があって、やはり、どの子も自分の人生をより良くしたいという思いはあるので、その部分はあまり邪魔しなければ、その辺りから社会のほうにつながっていくという子たちは多いのではないかなというのも、経験上と色々な支援者のお話を伺っていても感じています。

逆に、あまりにも短期で「こうじゃなきゃいけない」というのが強いと、その部分の自分のこうなりたい、人生をより良くしたいという希望とか願いが潰されてしまうというか、かえって反抗してしまう、親が言うほうに行かないように行かないようにというように、親や周りの大人たちが自分のことを理解してくれない、自分の苦しさを分かってくれない、自分の状況についてとか自分の特性もある子もいるので、助けようとしてくれないというように思ってしまった場合に、やはり、そうではないところにはまっていってしまう、さらにそこに親子の関係が膠着した状態に、周りからも「こうじゃなきゃいけない、ああじゃなきゃいけない」と親御さん自身の考えも変わりづらくて、もう「こうじゃなきゃいけない」とかすごい厳しくなってしまうと、その状態がずっと長くいってしまうというのをひきこもりを支援されている方からもよくお話を伺うので、その辺りを見ていただくと、やはり柔軟にというか、個々の状況に寄り添う、その子がまず何を好きなのかということからだと思いますけど、ご家庭だったら何をとっても楽しく感じていて、何を得意にして、それを例えばゲームとか YouTube だったとしても、大人から見るとちょっとこれはって思うものだったとしても、そこに対して「そういうところが好きなんだね、どうしてそういうところが好きなの」って丁寧に聞いていくと、嬉しくなっているいろんなお話をしてくれますし、そこからやはり続いていく、例えばアニメが好きな子たちがそのアニメが好きだからというところから、アニメをきっかけに何か英語が好きになって、英語の勉強がしたくなって個別の英語の学習に行き、さらにその英語が専門のところに学びに行ったとか韓国が好きになってとか、そういう話をすごく聞くので、ゆったりした自分が好きなものからやはり学びたいという要求が出てくるので、そういったところを支援するというか、ソーシャルワークしていくというのも大切ななというように思います。なので短期でというよりは長期で、今見ていくというのが大切ななと思います。

二つ目のどのように関わるかという部分については、その家庭の中の子どもたちだとすぐには関わらなかったとしても、やはり親御さんに対して周りの大人の方が「こうじゃなきゃいけない」と、不登校問題だよねっていう態度より、もうちょっとやはりその子が今どんなことを楽しんでいるのかなとか、そういったところではまずその周りの人たちも理解していただく、今はフリースクールとかその様々な多様な場や先ほどの校内教育支援センターですとか、多様な場が学校の中にも外にもあるからそういったところもいつでも利用できるし、まずは今休養が必要な時期だったら、おうちの中でゆったり過ごせるといいよねというように、保護者の方にやはり安心を与えてあげることが大切ななと思います。

また、そういった子どもたちに企業の側から関われるとしたら、本当に結構面白い子たちが多いので、ぜひ何か大丈夫であれば、フリースクールとかも他の企業の方との連携を望まれているところが多いので、視察いいですかと言われれば、「ぜひどうぞ」と仰ってくださるのではないかなと思います。

あとは、例えば学校に行ってみたいと思った子どもたちが行ったときに、最初はやはり、なかなかエネルギーが疲れてしまうので、毎日って難しいですねっていった場合に、普通の教室に行ったときに休んだときの課題がまたそのまま残され、次に来てまた休んだときの課題があってくると本当に苦しくなってしまうというお話も聞くので、何か少し先ほどのお話にもあったように、先生 1 人が同じペースで同じ内容からどんどん学校も変わってきているとは思いますが、タブレットを利用して個別最適な授業をして、みんなと同じ教室にいるけれども、それぞれちょっとこの時間は、例えば算数でも 6 年生の子が少し学び直して 2、3 年生の勉強する場合もあれば、逆に 2、3 年生の子がもっともっと学びたいということで 4、5 年生の学びをする、みたいな感じの時間があれば、少しその中で自分のペースで学べるようになったり、学校の中の不登校になった子が戻りやすいというか、参加しても心の負荷が感じられないようなものになれば、もう少し行き来というか少し疲れたときは休むし、また学校に行きたいなと思ったときはスムーズに行けるのではないかなと思います。

子どもたちはやはり地域の学校の中で安心して過ごしたいというか、戻れるようであれば安心して通いたいんですね。でも通わないというのは、やはり通えない理由が学校のほうにもまだまだあるから戻れないと思うので、そういったところがもう少し柔軟にというか、変わっていけるようであれば、とても戻

りやすいのではないかなと思います。

あともう一つ、引きこもりの支援をされてる方が仰ってたのと同じように、新卒一斉入社というのは難しいと、できればいろいろな事情があって少し空白があった方に対しても、入社が、職業経験が積めるような社会になって欲しいなというのは仰っていました。やはり就職氷河期で就職ができなくて、そのまま引きこもりになられたケースというのが多いらしいです。なので、そういった社会の在り方というのはもう少し変わってくれば良いとも仰っていました。す

(教育委員)

私は小学校の学習支援員として、主に低学年のクラスの支援に入っています。学校生活をしていると支援学級のみならず、どのクラスにも本当に多様なお子さんがいるのが分かります。確かに、今まで当たり前のようにされてきた一斉一律の授業では、既に知っていることだからつまらないと参加しない子や、又はそれまでの学びの積み重ねが不安定で、その時間の内容についていけないという子どももいます。更にその日の気分や体調で、授業に集中できないお子さんもいます。先生方も様々な工夫をされていて、プリントが両面に刷ってあって、片面には簡単に組み立てるように書き出しの部分が印刷されていてその続きを書けばいいというものや、裏面にはちょっとチャレンジして何も書いていないところで聞かれたことに答えましょうみたいなプリントが配られて、どちらに組み立ててもいいよって言われたり、書いたことに不安がある子は急にクラス全員の前で発表なんてできないと思うので、グループ学習とかお隣さんを見せ合ってやりましょうとかそういう学び方をしたり、あとグーで手を挙げればちょっとそこ分らないから助けてっていう合図だっていうことで、周りの子が説明したり助言をするお助けっていうものもできたりして、そういうのをたくさん使って授業を進めておられます。

その上で個別最適な学びを考えていくということはまた大切だと思います。進度別学習のたくさんのプリントや課題を用意するという取組も一つのアイデアだと思います。ただ、先ほどからお話を伺っていて、支援員というのは、元々先生がクラスに対して求めているものを無事に進めていくため、にやる気のないお子さんにやる気を出してもらい、これ出してと言われたら出していないものを出してもらい、書くよと言われたら書くように声掛けをしたりして、促して進めるということをするものだと思ってきていたのですが、やはり先ほどの不登校のお子さんたちの選択肢に何もしないというものもあるということをお聞きしたらとても新鮮で、それというのは学校に来るけれどもその時間は何もしない、その場にはいて何か聞いて雰囲気は掴んでいるけれども何もしない、という選択をするということもできるのかなと感じました。そうすると、やらなくてはいけないことばかりだから学校に行かないというそちらのほうの選択が少し減って学校に行くという意思につながる場合もあるのかなと感じました。その辺りの見方が今回とても新鮮な気付きをいただいたと思っています。

それで、先生方の力量というのはとても大切な要素だとは思いますが、そもそもクラスの人数が20数名なのと、30余名では、単純計算でも色々な工夫や準備が1.5倍の違いが出るかと思います。また、集団生活において、子どもたちの小さな衝突や、人間関係の複雑化への対応も、クラスの人数が増えていけば同等の負担増があると思います。なので、できることなら先生の増員及び支援員の拡充も必要だと思います。

また、コロナ禍で中断してしまった後、低迷している感の強いコミュニティスクールの学習支援ボランティアさんの協力を仰ぐことも大事だと思います。そのためには、諏訪市や学校が、こうなりたいこうしたいという方針を広く打ち出して、保護者や地域の皆さんに知っていただき、思いや願いを共有して進んでいけるといいと思います。個々を大切にする教育は理想的で、一人一人の子どもがより明るい未来を歩んでいくためにより良いことだと思いますけれども、それは、ただ自由気ままに自分の希望することだけを学べばよいというものでもなくて、人と意見が違ったときにどうすり合わせていくのか、どう暴力を振るわずにお互いの理解ができるのか、とか我慢とは違ってお互いに良い方向にいける、人と人が互いにコミュニケーションを取って、違いを認めつつ協働して、誰もが生きやすい社会を作っていく、という方向に向

いていって欲しいと思いました。

（研究主任）

支援の先生方には本当に日頃からお世話になり、現状特別支援学級のみで西中では入っていないので、通常学級にもいていただけたらいいなとは日々感じています。というのは、やりたいけれども、やり方が分からなくて困っているお子さんが教室にたくさんいるので、もしどなたかいてくださったら、今見切れないところも本当はやりたい子は勉強ができるなというのは感じています。

昨年度、豊田小と湖南小の研究主任の先生と一緒に、大阪市の大空小学校というインクルーシブ教育で大変先進的な学校に視察に行かせていただいたのですが、そちらでは支援員という形ではなくて保護者やボランティアさんの方が各教室に自由に入ってくださり、常に教室の中に大人が5人ぐらいいるという感じでした。だからといって先々の世話をしてしまうということではなく、その子が困ったら、助けを求めたら助けるというスタンスで寄り添っていらっしゃるのがとても印象的でした。なので形を整えるということはすぐにはできることはありませんが、子どもたち自身が困ったら助けを求めてよいと思ったり、いろんな勉強の仕方をする子がいるというように感じるのが、一番のインクルーシブ教育として先進的なのかなというように見ていて思いました。ですので、もし諏訪市で同じやり方をそのままやるというのは難しいかなとは思いますが、例えばまずは支援員の先生に通常学級に入ってもらいたいということから、もしかしたら何か風穴が開くのかもしれないな、というように研修してきたときのことを思い出しました。

他にも先生方の工夫というお話もありましたが、インクルーシブ教育という言葉が世の中に出る前からいろんな先生方がそれぞれ工夫されていたことがあって、西中の取組も特に通常学級の授業の様子などはどこでもやっているよということかもしれないのですが、そういうことを全ての子どもたちを置き去りにしない、一人も置き去りにしないという気持ちで毎時間やっていくことが必要だということを周知する時期なのかなと考えていますので、一部の先生の工夫ということではなく、全員でやっていくという、そういう研究を進めていきたいなと思っています。そのためには発表の中でもお話しましたが、ICT機器の充実というのがやはり今後必要になってくるかなと思いますので、予算もあることとは思いますが、是非前向きにというように感じました。

（教育長）

様々な実践の例、また、ご意見いただきましてありがとうございます。この話は話し出すと止まらなくなりそうなので、いくつかだけお話ししたいと思います。一つは自分が好きなことと、あるいは興味があることだけやっていいのかという問いもあると思いますけれども、ただ先ほどの実践を聞けば、生駒さんからは自分が動き出すんだと、子ども自身が動き出すことを大事にする、それで子ども自身がより良い人生を歩みたいと思っている、そこを信じてやると、そうだなと思いますし、西中のあやめ教室のような事例ですと、やはり自分がその日にやることを選んで、自分がいる場所を選んで、そして学んでいくというこれは原点だろうなと思います。では、好きなことだけやっていいのかというと、まあ好きなことだけというのはないですけれども、興味あることからまずやるというのはあるべきことだろうなと思いますし、逆にやらされたことによって障害が生まれるというのですかね、よく二次障害と言われるかもしれませんが、新たに障害が生まれるほうがよくないだろうなということを思います。そうすると、まず興味関心があること、自分が取り組みたいこと、これを大事にしながら教育支援をしていくということが大事だろうなと一つ思ったことです。

二つ目は、先ほど教育委員からありましたが、学校とはどういうところか、こういう問いがあると思いますけれども、これもなかなか壮大なことだと思います。私も委員の話に本当に賛同していますけれども、結局学校ってなんのためにある場所なのだろうって学校の意義を問いただしてみれば、元々人っていうのは自由に生きたいものだと思うんです。自分が生きたいように生きたいと思っているけれども、もう一方で、そのことによって周りの同じように生きようと思っている人の邪魔になってはいけないと思うんですよ。そうすると、そのお互いの生きたいということを尊重できるようなそういう感覚、あるいはお互いの

権利を尊重できるような感覚、あるいは自分の持っている権利をしっかりと自覚するような、そういった、本当に平たく言うと人権みたいな話になるのかもしれませんが、お互い自由に生き合えるそういう権利を尊重し合う感覚を学ぶ場が学校なのではないかなということを思っているの、その辺りのところを学校の意義ということで共有していきたいなということを、今日お話を聞いて思ったところです。

最後に三点目とすると、色々なことを共有していくということはとても大事なことだと思います。ちょうど伊東先生の話の中に大空小学校の話がありましたが、あそこは多分参観に行くと完全に見学するということは認められないと思うんですね。必ず来た人は必ず当事者になるということが求められる、そういうことだと思います。そうするとコミュニティスクールでも学校に来た人が必ず当事者となってその傍観者ではなくて当事者となって関わると、それも先ほど生駒さんのお話にあった、関わることによってポジティブな感覚を持ってくるという、好循環につながっていくのではないかなということを改めて思いました。

ということで時間ですので3点だけお話をさせていただきました。もやもや感は生まれたでしょうか。ありがとうございました。

(副市長)

ちょっと自分もまだ意見がまとまりきれてないですけども、一つは多様な児童生徒の教育を受ける権利に対して、その多様な教育を提供するのは、誰なのだろうなと思います。学校現場は一定の物差しで採用された学校の先生方が立っているわけで、そこにある多様性というのは、多分限界のある多様性だと思います。なので、先ほど生駒先生のお話にもありましたけれども、その地域の大人、地域の斜めの関係の、何かちょっと地域のおじさんやおばさんが斜めの視点から教えてくれるみたいな関係性はいいなと思いましたし、自分も子ども時代を振り返ってもそういう人が大切な事をだいた教えてくれたことを思い返しました。

もう一つは、これももう話が出ましたけれども、やはり人類は集団で生き延びていくものだと思います。集団の中で我慢したり譲りあったり折あったりして生きていくということと、一方で自分のその多様性を認め合って一人一人を大切にすること、この間に、少し矛盾があるのではないかという心配があるけれども、それでもそこを乗り越えていくということを先ほど、教育委員や教育長の話聞いて思いました。

(市長)

本当に今日のテーマは、教育長が仰るように絞り切れない、結論があるという課題ではなくて、現状をどのように捉えて、少しでもより良くするためにはどうしたらいいかという一つのきっかけになったのだろうというように思います。学校現場で、そこまで丁寧に一人一人に寄り添おうとしている努力があるのかというのを私は改めて初めて知った部分もたくさんありまして、本当に頭が下がる思いです。

しかし、先生方も、無尽蔵に次々と現れるかというそういうことではない、限られた学校の中で提供できるものをしてくださるということです。それには支援員の先生の協力も増えてきているということもあるということ、学校で何を提供するかということと、そして今日は生駒先生からお話をいただきましたが不登校になる子どもたち、このテーマというのは関連はありますけれども、ちょっと違う種類なのではないかなと思いました。というのは、なぜ学校に行かないのか、行きたくないのか、今副市長が私と同じことを考えておられて、人間って草食動物でそれで弱いですね、個々は。ですから仲間を作って集団でやっていかなくてはならないという、根本的な生物学的なセンスというのは変わらないと思います。ところが、おそらく学校へ行きたくない子というのは、学校が安心な場ではない、危険な場だという判断をすると思います。なぜ危険かという、おそらく子どもは、赤子のときは体温調節するためにも慌てて包んだりして大事に育てますが、それを衣を着せられないで放り出されたような、例えば悪いかもしれませんがけれども、それはやはり危険な状況ですね。私が思うに、孤立しないということは大事だと思いますけれども、そういった意味で、要するに味方の集団、私がどんな格好でどんな格好悪いところを見せようが、思ったとおり暴言を吐いたり泣いたりいろんな感情の中で生きていても、最後にそれを理解してくれて守

り切ってくれるっていうのは、やはり親であったりあるいは家族兄弟であったり、そしてかつては周辺に叔父さん叔母さん従兄、親戚の皆さんがある程度近くにいる、あるいは仲間の子どもの集団があって、ガキ大将的な親分がいて、その子分のような友達の弟が障害を持っていたとしても、もしいじめられたらその強い子が行って戦ってきてくれる、守り切ってくれるっていうような、そういう安心感、これやはり味方の集団だと思うのです。信頼し合える仲間の集団、味方の集団と思える、そう本人が思えるところではないかという判断だと思うんですね。

というのも、私もいじめのこととかがすごく話題になったときに、すごく学校で出来が良くて、スポーツもできるし学問もできるし、生徒会も一生懸命やるような子が不登校になったりする。なぜかという、やはりその他の集団の人たちが「いい子ぶりっ子して」とか、「勉強ができればいいってもんじゃないわよね」とかいう噂を自分が耳にしたときに、すごく危険を感じますよね。みんなが頑張ればいいというものではないのだと、そういうときに守ってくれるという、そういう居場所ではないという判断をしたときに、学校に行かなくなるのだと思います。そうすると、先ほど地域の中に斜めの関係の大人がたくさんいたらいいと、これは今その核家族化になり、それから個の、それはひとり親家庭であったり、あるいは転勤族で全く違うエリアに行かなくてはならなかったり、そういう方たちがたくさんいて、昔の第一次産業の農業の周りに、生産するところも生活するところもみんな一緒に、一緒に食べて一緒に生活して一緒に働いて一緒に遊ぶという、そういう安心した集団から切り離されている、そういう人が多くなっている。それを支える組織というか、家族の更にもう一回り、あるいは兄弟からもう一回りの仲間、安心できる味方の集団、これがなかなか育ってきていない。かつてはあったけれどもなくなってしまい、それがもう 1 回本当は欲しいのではないかと思います。それはどうして学校ではだめかと言うと、学校というのは社会、危険なところ、もっと危険なところは広い社会ですけれども、そのトレーニングの場所として学校があるとすると、学校も社会に近い、社会の中の一部の学校、だから家族とかプライベートの中の仲間の集団とはやはり別だという判断だと思いました。

ですから行政とすれば、学校の中でそういう社会の中のトレーニングの場としての学校の中でいろいろな人たちに関わりながら、そうは言ってもコミュニケーション能力だとか、習慣・マナー・道徳、それから喧嘩をしたり、それから仲直りをしたりっていうことを学んだりする現場としての学校、これをサポートするために、ICT 教育が必要だとか、今頑張って取り組んでいくことに必要なことをサポートする、これは教育委員会としてもやるべき政策として支援をしていかなければいけないということを感じます。同時に、健康福祉部の子どもの扱いの延長線上として、一人一人の子どもの環境、いかに安心できる自分を支えてくれる仲間とか、その真綿のように一緒に包んでくれる居場所が確認できるような支援っていうのも同時に必要なのではないかなと。それが、仲間の安心できる味方の集団が強い人ほど、自信をもって社会に出ていくと思います。そんなことにいろいろな皆さんのお話を聞いて気付かせていただいたところです。

(生駒代表理事)

先ほどご紹介いただいた第 2 弾の調査をしております、12 月の初旬にまたシンポジウムを開きますのでよろしかったら皆様ご視聴ください。今日参加させていただいて、本当に教育委員の皆様のお話ですとか、教育長、市長のお話を伺ってすごく感動しております、どうしても不登校の保護者の方とお話をさせていただくと、なかなか行政がとか学校が分かってくれないとか理解されないというようなお話を聞くことが多いのですけれど、今私は会議に参加させていただいて、逆に本当にすごく理解が深い自治体様のお話を聞くことで、こんなに分かってくださっていたりとか、あと専門性があつたりとかっていうところで本当にありがたいなと思いました。私もそれを肌で感じられたことで、また保護者の方とか居場所の方たちに、やはりそこで諦めずにお話することで、人と人としての共通の理解というのは結べるのではないかなと、お話ができるなというように思いました。今日はとても参加できて私のほうがたくさん学ぶことがいっぱいあり、本当にありがたいなと思いました。

4. 閉会

以 上